

## In-dividual Theater:BUG Screen Week 2026

In-dividual Theater:  
BUG Screen Week  
2026

Theater:

Artists:  
Yu ARAKI / Cici Wu with Yuan Yuan /  
Shun IKEZOE / Umi ISHIHARA /  
Hayate Kobayashi / Masashi KOHARA /  
KYUNCHOME / Maya Erin Masuda /  
Aya MOMOSE / Kosuke NAGATA /  
Nina Fischer & Maroan el Sani /  
Masanobu NISHINO / OLTA /  
Kouta SHIGA / Mari SHIRAKAWA /  
Soh SOUEN / Takuya WATANABE

2026.  
07.03 Fri – 07.12 Sun

火曜休館、入場無料  
Closed on Tuesdays Admission Free

主催:BUG(株式会社リクルートホールディングス)

T100-0801 東京都千代田区丸の内1-9-2 グラントウキョウウスタワー 2F  
Open Tokyo SOUTH TOWER 2F 1-9-2, Marunouchi, Chiyodoku-ku, Tokyo

BUG  
RECRUIT

株式会社リクルートホールディングスが運営するBUGでは、2026年7月3日(金)より、「In-dividual Theater:BUG Screen Week 2026」を開催します。本プログラムでは、スタッフがピックアップしたアーティスト17名の映像作品を上映し、新たな枠組みでアーティストのキャリア支援を試みます。

## ステイトメント

毎日126万人が乗降し続ける東京駅では、おびたしい数の人が駅構内を足早に行き交う。身体を輸送するかのようには目的地をめざし、タスクが降り注いでくる日々のなかでは、よそ見をしたり、立ちどまったりすることなんてできようか。そんな東京駅の真横、オフィスビルの1階に「アートセンター」としてのBUGがある。駅構内では立ちどまれなくとも、ここでは座りこめるし、有料の入場券もいらない。

だからといって、ここで1本の映像作品を見てもなにかが変わる保証はない。けれども、変わる可能性だって十分にある。そこにかけている。はじめてふれる価値観や認識の外にあった事象、心の奥底でねむっていた感情などと邂逅する機会――。ここで見たものを咀嚼しようと、思考をめぐらせてみる。自分の輪郭を取り戻そうとする。社会で起こっていることに目を凝らす。理解できない言動の背景を想像する。なにかを変えてみようともがき、抵抗するための力を得る。

周縁で透明化された声や存在に目を向けたり、それぞれの形で制度からすり抜け、抗おうとしたりする17名のアーティストたちの作品がそんな契機になることを願って。シアターとしての空間を立ち上げる。

## 3つの特徴

### 1. マーケットに展開しにくい映像作品を制作するアーティストのサポート

映像作品は、販売やコレクションのハードルが高く、経済的な循環が生まれにくい作品形態の一種です。非営利で運営するBUGでは、積極的にこうした表現に光を当てていきます。今回は既存の映像作品を上映し、アーティストにその対価を支払うことで活動のサポートを行います。

外部の視点によって語られてきた風景を、内側からの表現によって見つめ直す試みです。

### 2. 映像作品と向き合える環境の構築

映像作品と出会う機会が多いものの、時間の制約により「作品を初めから終わりまで通して鑑賞できない」という状況は多々発生します。今回は、上映タイムテーブルの事前公開や長時間滞在を前提とした空間設計を行うことで、最初から最後まで作品と向き合える環境を整えます。

### 3. 既存作を見つめ直す機会を

これまでBUGは、アーティストに制作費とアーティストフィーをお支払いし、新作を制作・発表するための機会を多く設けてきました。一方で、過去に生み出された作品を見つめ直して紹介し、そこに対価を支払う機会も重要だと考えています。

## 参加アーティスト（アルファベット順）

荒木悠 / Yu ARAKI

Cici Wu with Yuan Yuan

池添俊 / Shun IKEZOE

石原海 / Umi ISHIHARA

小林颯 / hayate Kobayashi

小原真史 / Masashi KOHARA

キュンチョメ / KYUNCHOME

マヤ・エリン・マスダ / Maya Erin Masuda

百瀬文 / Aya MOMOSE

永田康祐 / Kosuke NAGATA

Nina Fischer & Maroan el Sani

西野正将 / Masanobu NISHINO

オル太 / OLTA

志賀耕太 / Kouta SHIGA

白川真吏 / Mari SHIRAKAWA

ソー・ソウエン / Soh Souen

渡邊拓也 / Takuya WATANABE

## 関連イベント

会期中、出展アーティストとゲストによるイベントを開催します。

※追加のイベント情報や参加方法など詳細は、本展ウェブサイトの「イベント」にて随時更新します。

2026年7月3日(金) トークイベント マヤ・エリン・マスダ×小川公代

2026年7月4日(土) トークイベント マヤ・エリン・マスダ×百瀬文

2026年7月8日(水) トークイベント 小原真史×山城知佳子

2026年7月9日(木) トークイベント 石原海×志賀耕太

## アーティストプロフィール



Photo by ©Kaho Okazaki

### 荒木悠 / Yu ARAKI

アーティスト・映画監督。2007年ワシントン大学サム・フォックス視覚芸術学部美術学科彫刻専攻卒業。2010年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修士課程修了。文化の伝播や異文化同士の出会い、またその過程で生じる誤訳や誤解の持つ可能性に強い関心を寄せている。特に、近年の映像インスタレーションでは、歴史上の出来事と空想との狭間に差異を見出し、再現・再演・再生といった表現手法で探究している。

#### 【参加した主な展覧会】

「六本木クロッシング2025展:時間は過ぎ去る わたしたちは永遠」(森美術館、日本・東京、2025年)  
 「BEFF7: Nowhere, Somewhere」(One Bangkok Forum、タイ・バンコク、2025年)  
 「キュレトリアル・スタディズ16:荒木悠 Reorienting —100年前に海を渡った作家たちと—」(京都国立近代美術館、日本・京都、2025年)



Photo by Rahul Shinde/JAL

### Cici Wu with Yuan Yuan

チチ・ウー[武雨濛]:ドローイング、映像、彫刻、インスタレーション、ファウンドオブジェクトなど、さまざまなメディアで作品を制作。ローカルな歴史やアーカイブを出発点とすることが多く、映画的なフレームを手段として用いることで、社会的・文化的・歴史的な帰属に関する超越的な物語が、いかにして私たちの自己体験を形作っているかを考察し、反映させている。

ユエン・ユエン[袁远]: 文章、映像、写真を用いて、集団的かつ個人的なレベルで人間が経験する帰属感と疎外感について考察している。ユエンの実践は、人工的な構造物と自然界との結びつきを探求し、私たちが風景、記憶、感情、そしてより大きなシステムの中でどのように自らの位置づけをしているのかを問いかけ、しばしば人間中心の視点を問い直している。

#### 【参加した主な展覧会】

第36回サンパウロビエンナーレ「Not All Travellers Walk Roads – Of Humanity as Practice」(シッシロ・マタラッツォ・パビリオン、サンパウロ、ブラジル、2025-6年)  
 アジアン・アート・ビエンナーレ2024「How to hold your breath」(国立台湾美術館、台中、台湾、2024-5年)  
 「Belonging and Difference」(Empty Gallery、香港、2023年)



### 池添俊 / Shun IKEZOE

1988年香川県生まれ、大阪府育ち、東京都を拠点に活動。

映画作家、アーティスト。普段社会や歴史の中で声が残されない者たちの映画を作るため、個人の話や記憶を収集し、普遍的な物語へと再構成する。フィルムとデジタルなど、様々なメディアを用いた映画やインスタレーション作品を発表し、映画と現代美術の領域を横断しながら、国内外で活動を展開している。

#### 【参加した主な展覧会】

「令和6年度 文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業 成果発表イベント『ENCOUNTERS』」(TODA HALL & CONFERENCE TOKYO、東京、2025年)  
 「第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川、2022年)  
 「第31回マルセイユ国際映画祭」上映(Théâtre du Gymnase、マルセイユ、フランス、2020年)



### 石原海 / Umi ISHIHARA

ロンドンと北九州を拠点にする映画監督／アーティスト。社会構造の外側にあるコミュニティや人々の生活史を記録する映像制作に取り組んでいる。その実践として、個人の記憶と社会問題を交差させ、身近な人々や地域住民など、プロの役者ではない生活者たちと共に作品制作を行っている。

#### 【参加した主な展覧会】

Umi Ishihara: Nocturnal Melody(Gasworks、イギリス、ロンドン、2026年)

「ホーム・スイート・ホーム」(国立国際美術館、日本、大阪、2024年)

第15回shiseido art egg石原海展「重力の光」(資生堂ギャラリー、日本、東京 2021年)



### 小林颯 / hayate Kobayashi

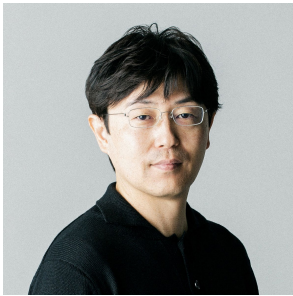
1995年生。京都府拠点。東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。2020年から24年までドイツ・ベルリンへ渡独。24年にベルリン芸術大学大学院アートアンドメディア科を修了。装置、映像、詩作、パフォーマンスを通じて、エクソフォニー(「母語の外にある状態一般」の意)の新たな語りの形を再考している。ドイツで言葉がばらばらになった経験から、近作では、よそ者／移動者の言語感覚を主題に扱う。

#### 【参加した主な展覧会】

「Appertus #1」(千鳥文化ホール、大阪、2026年)

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2025「おloquさん」共作:小出麻代、高橋久美子 ほか(京都芸術センター、京都、2025年)

小林颯個展「ポリパロール」(アートセンターBUG、東京、2024年)



### 小原真史 / Masashi KOHARA

東京工芸大学准教授。IZU PHOTO MUSEUM研究員として「富士幻景」展(2011年)、「宮崎学 自然の鉛筆」展(2013年)、「増山たづ子 すべて写真になる日まで」展(2014年)、などを企画。その後、フリーランスとして「スペクタクルの博覧会」展(恵比寿映像祭、2022年)などを企画。単著・共著に『帝国の祭典 博覧会と人間の展示』、『戦争と平和 〈報道写真〉が伝えたかった日本』、『森の探偵』などがある。



### キュンチョメ / KYUNCHOME

キュンチョメは、ホンマエリとナブチによって2011年に結成されたアートユニット。芸術は「新しい祈りの形」であると捉え、世界各地で、詩的でユーモラスな作品を制作している

#### 【参加した主な展覧会】

恵比寿映像祭2026(東京都写真美術館、東京、2026年)

六本木クロッシング2022展:往来オーライ!(森美術館、東京、2022年)

あいちトリエンナーレ2019(愛知、2019年)



Photo by Hayato Itakura

### マヤ・エリン・マスダ / Maya Erin Masuda

ベルリン、東京、ハーグを拠点とするクィアなアーティスト・リサーチャー。彼女の実践は、サイボーグ・セオリー、抵抗としての欲望、クィア・エコロジーを主題とし、ミルクの循環、汚染された植物、人工皮膚といった非人間的な存在と協働しながらナラティブを構築する。マヤの作品は、クィアな生殖やホルモン療法、ジェンダー規範に関する自身の経験から出発し、ケアと抵抗の行為としての種の境界を超えた連帯の形を提示する。

#### 【主な個展】

《Ecologies of Closeness》(YCAM、日本、2025年)

《Sleep, Lick, Leak, Deep...》(大和日英基金ロンドン、英国、2024年)

#### 【主なキュレーション】

《Ground Zero》(京都芸術センター、日本、2023年)



### 百瀬文 / Aya MOMOSE

1988年東京都生まれ。2013年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。映像やパフォーマンスを中心に、他者とのコミュニケーションの複層性や、個人の身体と国家の関係性を再考する。近年はフェミニズム理論を用いながら、個人の身体を経由した神話や古典の再解釈を試みている。

#### 【参加した主な展覧会】

「百瀬文 口を寄せる」(十和田市現代美術館、青森県、2022年)

「国際芸術祭 あいち2022」(愛知芸術文化センター、愛知県、2022年)

「フェミニズムズ/FEMINISMS」(金沢21世紀美術館、石川県、2021年)



### 永田康祐 / Kosuke NAGATA

1990年愛知県生まれ、神奈川県を拠点に活動。

自己と他者、自然と文化、身体と環境といった近代的な思考を支える二項対立、またそこに潜む曖昧さに関心を持ち、写真や映像、インスタレーションなどを制作している。近年は、食文化におけるナショナル・アイデンティティの形成や、食事作法における身体技法や権力関係、食料生産における動植物の生の管理といった問題についてビデオエッセイやコース料理形式のパフォーマンスを発表している。

#### 【参加した主な展覧会】

個展「イート」(gallery αM、東京、2020年)

「見るは触れる 日本の新進作家 vol. 19」(東京都写真美術館、2022年)

あいちトリエンナーレ(愛知県美術館、2019年)



### Nina Fischer & Maroan el Sani

ベルリンを拠点とするアーティスト・デュオ、Nina Fischer & Maroan el Sani(ニナ・フィッシャー& マロアン・エル・サニ)は、1995年より共同で制作活動を行ってきた。二人の実践は、介入的かつシチュエーションист的な手法を取り入れながら、アート・サイエンス・テクノロジーが交差する領域に位置している。二人は、映像、サウンド、インタラクティブ・インスタレーションなどのタイムベースド・メディアを用い、領域横断的なリサーチを通して、気候変動がもたらす心理社会的な影響を、人間以外の存在の視点も含めて探究している。作品は、人間中心的な物語を問い直しながら、あらゆる生命の相互連関に目を向けるものであり、環境変化の影響を受ける生態系や種、さらには人間以外の存在に想像上の声を与えようと試みている。また、地域住民や科学者との協働を通じて、コミュニティとの対話や具体的な行動を促すアプローチも特徴的である。アートを「気づき」のきっかけとして用いながら、コミュニティのレジリエンスを育み、共有された懸念をアクティヴィズムへとつなげていく。その実践は、観客を受動的な観察者から能動的な参加者へと導くことを目指している。

#### 【参加した主な展覧会】

シャルジャ・ビエンナーレ15 - Thinking historically in the present(アラブ首長国連邦、シャルジャ、2023年)

マニフェスタ13 - The European Nomadic Biennial(フランス、マルセイユ、2020年)

Nina Fischer & Maroan el Sani「Freedom of Movement」(MAXXI 国立21世紀美術館、イタリア・ローマ、2017年)



Photo by Koichi Tanoue

### 西野正将 / Masanobu NISHINO

美術館・映像ディレクター。

日々の生活の中で感じた違和感を日常を考察するための新たな視点として提示するスタイルで制作。

メディアは限定せずに映像から立体とその手法は多岐に渡る。

また映像ディレクターとしても活動し、美術館や芸術祭などアート関連の映像制作も多く手がけている。

#### 【参加した主な展覧会】

美大じゃない大学で美術展をつくる vol.3 「SOS 応答と対話で「何か」を探す」(武蔵大学江古田キャンパス、日本、東京、2025年)

「おしゃべりはやめて、お静かに」(DAILY SUPPLY SSS、日本、東京、2022年)

「黄金町バザール2016」横浜黄金町(日本、神奈川、2016年)



Photo by Ryuichiro Suzuki

### オル太 / OLTA

2009年に結成されたアーティスト・コレクティブ。メンバーは井上徹、斉藤隆文、長谷川義朗、メグ忍者、Jang-Chi の5名。近年では国内外の芸術祭、劇場、美術館で横断的な作品発表を重ね、観客を巻き込みながら、現在と過去、リアルと虚構、性差、国などの境界線を、反逆的遊びをもって揺さぶるような体験を生み出している。

#### 【参加した主な展覧会】

『Eternal Labor(エターナル・レイバー)』(国際芸術祭「あいち2025」、愛知県芸術劇場、2025年)

『ニッポン・イデオロギー』(横浜国際舞台芸術ミーティング2023、神奈川、BankART Station、2023年) / (ロームシアター京都、2023年)

釜山ビエンナーレ2016「Hybridizing Earth, Discussing Multitude」(韓国、2016年)



### 志賀耕太 / Kouta SHIGA

1998年東京生まれ。東京都を拠点に活動。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程在籍。都市や身体を規定してきた制度や歴史的な文脈を流用し、パフォーマンスや語りによってそれらを組み替える映像作品を制作する。近年は仮設された占領期の野球場や架空の地下裁判所を舞台にしたインスタレーションを発表。「遊び」を通して主体のあり方を問い直している。また、自主映画や出版の企画を行なっている。

#### 【参加した主な展覧会】

「コート・オブ・ジャスティス」(229gallery、日本・東京、2025年)  
 「SAPPORO PARALLEL MUSEUM 2025」(大丸札幌店、日本・札幌、2025年)  
 「SIDE GAME」(マイナビアートスクエア、日本・東京、2024年)



### 白川真吏 / Mari SHIRAKAWA

1998年静岡県富士市生まれ。2023年多摩美術大学油画専攻卒業。現在は東京藝術大学大学院修士課程先端芸術表現専攻に在籍。架空のキャラクターとその身体に関心を持ち、映像やパフォーマンス作品を制作している。キャラクターと人間の関係性について問い直したり、オタク文化における身体表象を現実の身体へ逆輸入し、生産を前提とした身体の振る舞いから脱却することを試みている。

#### 【参加した主な展覧会】

「NEW New Artists / NEW Backbone Artists 2025」(Art Center NEW、神奈川県、2025年)  
 「金沢ナイトミュージアム・エクスペリメント展示力合宿 in かなざわ」(金沢市民芸術村、金沢アートグミ、第一ビル、石川県、2023年)  
 「『愛込め♡ミラクルロマンス(略)』についての証明であり、他者からの干渉を許す為の装置」(サイレン 601、神奈川県、2021年)



### ソー・ソウエン / Soh SOUEN

福岡を拠点に活動。「呼吸」、「お臍」、「卵」など生と密接な事象から、人間の性質に迫る作品を多く手がける。近年では「呼吸」を最も根源的に世界を変容する運動ととらえ、ワークショップやインスタレーション、パフォーマンスを国内外にて発表。コロナ禍に始まったサラ・ミリオとのプロジェクトや、銀座エルメスフォーラムにて内藤アガータの作品とパフォーマンスを実施するなど、様々な協働のかたちで独自の活動を展開している。

#### 【参加した主な展覧会】

「開館30周年記念展『日常のコレオ』」(東京都現代美術館、東京、2025年)  
 「Your Body is the Shoreline」(√K Contemporary、東京、2023年)  
 「京都精華大学55周年記念展 FATHOM — 塩田千春、金沢寿美、ソー・ソウエン」(京都精華大学ギャラリーTerra-S、京都、2023年)



**渡邊拓也 / Takuya WATANABE**

渡邊拓也は、主に映像インスタレーションを手がけるヴィジュアル・アーティストである。移動や労働、人と環境のあいだにある複雑な関係性を主題とし、コミュニティとの関わりや社会状況に対する綿密なリサーチを行う。個人の身体や空間という具体的な場に折り畳まれている、歴史や制度、市場や生態が絡まり合う構造的な力を明らかにする。

**【参加した主な展覧会】**

「クリテリウム101 渡邊拓也」(水戸芸術館、茨城、2024年)

「Some Sort of Tenderness\*」(Delfina Foundation、ロンドン、2024年)

「誰かのシステムがめぐる時」TOKASレジデンス 成果発表展(TOKAS本郷、東京、2023年)

**作品画像**



荒木悠 《ROAD MOVIE》 2014年



Cici Wu with Yuan Yuan  
《Belonging and Difference》 2023年  
Courtesy of the artists and Empty Gallery



池添俊 《スペクトラム》(ワークインプロGRESS) 2025年



石原海 《激雷》 2024年



小林颯 《dailylog》 2021-2022年



小原真史 《カメラになった男 写真家 中平卓馬》 2003年



キュンチョメ 《声枯れるまで》 2019年



マヤ・エリン・マスダ  
《皮膚の中の惑星／All Small Fragments of You》 2025年



百瀬文 《山羊を抱く／貧しき文法》 2016年



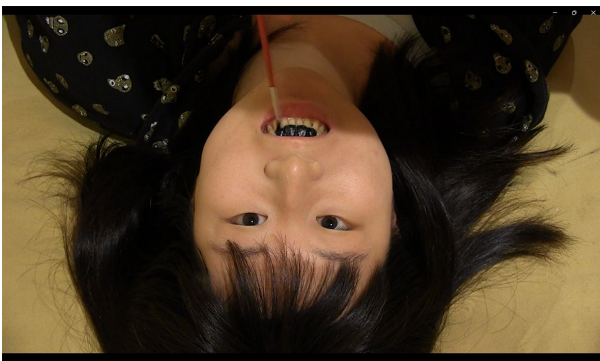
永田康祐 《鮭になる》 2024年



Nina Fischer & Maroan el Sani  
《Intermundis》 2025年



西野正将 《おしゃべりはやめて、お静かに》 2022年



オル太 《複製された笑い》 2016年



志賀耕太  
《スパイラルジェットティもんじゃ》 2024-2025年



白川真吏 《やさしくなりたい》 2023年



ソー・ソウエン 《Eggsesice》 2022年



渡邊拓也 《土が血を循るとき》 2025年

## ■ 展覧会概要

- ・タイトル：In-dividual Theater:BUG Screen Week 2026
- ・会期：2026年7月3日(金)～7月12日(日)
- ・主催：BUG(株式会社リクルートホールディングス)

### BUG

〒100-6601

東京都千代田区丸の内1-9-2 グラントウキョウサウスタワー1F  
Gran Tokyo SOUTH TOWER 1F, 1-9-2,  
Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo

### 交通アクセス

JR東京駅八重洲南口直結  
東京メトロ京橋駅8番出口から徒歩5分  
東京メトロ銀座一丁目駅1番出口から徒歩7分

### <施設情報>

- ・BUGはオフィスビル1階にあり、入り口から段差なくアクセスできます。カフェの奥に広がる空間がBUGです。
  - ・授乳室は設置していません。
  - ・多目的トイレはビル内の同フロアに1つあります。(おむつ交換台、ベビーチェア、オストメイト設置)
  - ・トイレは地下1階(八重洲地下街)に複数あります。エレベーターまたはエスカレーターが利用できます。
  - ・BUGには専用駐車場はありません。ご来館には公共交通機関をご利用ください。
- ※BUGでは様々な事情を持つ皆様をお迎えできるよう、スタッフが可能な範囲でサポートや情報提供に努めています。

お問い合わせ先:株式会社リクルートホールディングス リクルートアートセンター 広報担当  
Mail : info.bug@r.recruit.co.jp